

## 活動テーマ

エンエンワという伝統行事を核に中高年層と若者層＋お母さん世代の女性をつなぐ  
コミュニティーデザインによる持続可能な地域創り

小川町上古寺・下古寺地区 十文字学園女子大学

## 1 活動目的

本プロジェクトは、当該地域在住の高年層の方々と若い住人たちとをつなぎ、住民によるワークショップで地域課題を明確化し、課題解決のアクションへ導く。また、地域のイベントのサポートを行う中で、継続可能な新たな融合コミュニティー創造のお手伝いをするものである。単なる一過性の賑やかさではなく、住民の方々によるサステナビリティ（持続可能性）を意識した 対話型サポート の在り方を探るものである。

## 2 活動地域の現状

小川町上古寺地区（上組・中組・下組）・下古寺地区（以降古寺地区と記述）は中山間地特有の様々な問題を抱えている。古寺地区の中でも特に上古寺地区上組は戸数の減少も大きく、空き家などの問題も顕在化している。一部の農家が盛んに作農されているのみで事実上離農されている家も増えてきている。高齢化も進み、特に若い層の流出は止める術がないという。とはいうものの、地区の活動はまだまだ健在である。問題は組織の高齢化で、地域活動の主な担い手は高齢者という、中山間地特有の諸問題を抱えている。

## 3 活動内容

①5月15日には、十文字学園女子大学図書館内シアターで小川町古寺地域の方々をお招きして小川の和紙の歴史と文化ワークショップを特別講座として一般公開し、伝統的な七夕まつりを実演いただいた。この様子はテレ玉で取材を受け、夕方のニュース番組で取り上げていただいた。



②7月7日小川町の手漉き和紙を使った和紙フォトグラフワークショップを学内で行った。古寺地区でもかつては、紙すきを営んでいらっしゃる家が何件もあったのだが、現在はもうない。しかし、今でも紙漉きの道具をお持ちの家は多く、かつての山里の記憶を伝えていただいた。



ワークショップでは、写真作家の浅見俊哉氏をアドバイザーとしてお迎えして、和紙に感光材を塗り、参加者の思い出の品を置き感光させ作品にする「フォトグラフワークショップ」を行った。文芸文化学科の1年生が中心に参加し、完成した作品はロビーに展示し、多くの学生たちにも関心を持ってもらえた。

③暑気払い・そうめん流しは、今年で3回目。

地域活動でいつも応援頂いているA家のみなさんのお蔭で実現できている。ご当家のお父様は当初から歓迎してくださったが、癌を患われていて、昨年11月に亡くなった。長く

病院で療養されていたが、そうめん流しの時、自宅にお戻りになり、体調はけしてよくない様子だったが、最期のお話をする事ができた。学生たちにとっても、年配者とお別れをしなくてはいけない初めての出来事だったものもいて、ショックを受けていたが、人の死を通して、繋がり大切さを学ぶ上でも、貴重な体験になったようだ。また、初めて参加する留学生たちは、そうめん流しに大興奮。地域の方々との交流も一気に深まった。



④古寺地区の大きなイベントの一つ、地区対抗運動会の応援に伺った。参加は4年目とあって、地域の方々も楽しみにしてくださっている。

地域住民のほとんどの方々に参加されるイベントだけに、様々な方々の地域に対する思いを聞くチャンスとなった。また、一昨年前に作成した応援旗を喜んで使ってもらっているのを見ることで、自分たちの存在意義も感じられる会となった。



お昼は、手作りの豚汁やおにぎりなどをふるまっていたいただき、益々親交が深まった一日になった。終了後のお疲れ様会にも参加させていただいた。

⑤エンエンワのサポートは、本来神儀であり、よそ者は拒絶されがちであるが、信頼関係構築に成功し、役割をいただけるようになった。

## 4 成果

沢山の集落人口と強固な旧来型の地縁コミュニティで支えられてきた伝統行事のエンエンワは、その運営方法も特殊で、現在の住人の意識と組織では継続が難しくなっていた。しかし前述の「しきたり」というアンタッチャブルな呪縛によって思考停止に陥っていたが、今年になって、あらたな組織作りの話が対話の中に出てくるようになり、変化の兆しがみえるようになってきた。

## 5 課題

当初は、伝統行事のエンエンワが帰属意識の核となるだろうという仮説のもと、若い世代の帰属意識を地域の独自文化の伝承を通してどのように醸成強化するか、ということを中心に進めてきた。しかし、単に地縁型コミュニティの強化だけで解決できる問題ではないことに気づいた。持続可能な地域づくりのためには旧来の息苦しくなってしまう危険性のある結束力が硬すぎる地縁型コミュニティだけでなく、テーマ型コミュニティと呼ばれる、興味のある人がゆるくつながるような環境作りも必要で、併せて周辺域の市民の関心と参加の必要性も分かって来た。「関係人口」を増やすことにも目を向け、地域の方々との対話と実践の継続が必要だろう。また、女性の地域での生き方改善も課題である。

## 6 次年度以降の計画

築いた信頼関係を大切にして、埼玉県補助事業が終わった後も、ひきつづき活動を行っていききたい。